

# 香取遺産

vol. 141

## — 伊能忠敬、ふたつの日記 — 「文学青年から測量家へ」

伊能忠敬は全国測量を始める以前にも、東北方面と関西方面の旅に出かけています。記念館にはその際に記された旅日記が2種類伝わっています。一冊は忠敬33歳のときに、妻の達と出かけた松島旅行の日記です。「奥州紀行」という題名がつけられています。日記には経由地の距離と日々の経費などが毎日書かれています。が、目的地だった松島周辺を忠敬はとて詳しく記しています。

これは忠敬が松尾芭蕉の「奥の細道」に強い影響を受けていたからで、旅先での行動を見ると当初から旅の目的が芭蕉の足跡を訪ねることにあつたようです。安永7年(1778)6月10日に仙台城下を出発した忠敬は、そこから塩釜神社までの途中、芭蕉が詠んでいる宮城野、沖の石、末の松山、野田の玉川などを積極的に見て歩いています。塩釜神社では建物の素晴らしさや観音堂から見える景色を「その景色、筆墨の及ぶ所にあらず」と、この日記では珍しく感情を込めて記述しており、興奮しながら筆を走らす若い忠敬の気持ちが伝わってきます。他にも芭蕉が訪ねた壺の碑や多賀城の古跡を訪ねながら仙台へ戻った忠敬は、13日には帰路につきますが、帰りの二本松でもやはり芭蕉が記している安達が原の黒塚に立ち寄っています。

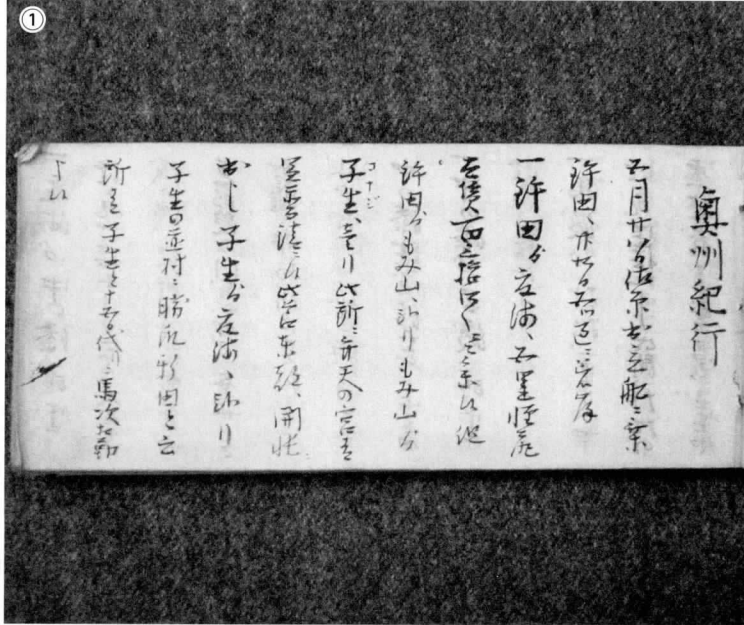


このように日記からは、俳句や和歌など文学関係に非常に関心を持った忠敬像をイメージすることができそうですが、もう一冊の日記からはまた違った面がみえてきます。「旅行記」と題されたもう一冊の日記は、忠敬が48歳のときに久保木清淵ら友人とお伊勢参りに出かけた際の旅日記です。この日記は忠敬が江戸へ出て本格的に測量・天文学の勉強を始める前に記されたものですが、そこには旅先で見えた山の方位・角度や北極星の高度などが記されており、忠敬が行く先々で測量をしながら旅をしていたことがわかります。

こうした記載内容の違いは、妻と友人という同行者の違いがあるのかもしれませんが、二つの日記が書かれた15年の間に、忠敬の興味が俳句や和歌などの文学から測量・天文学へと変化したのではないかともいわれています。

忠敬直筆のこれらの日記は、伊能忠敬記念館で展示されています。

伊能忠敬記念館 ☎(54)1118



①奥州紀行②旅行記(表紙)③旅行記(本文)